

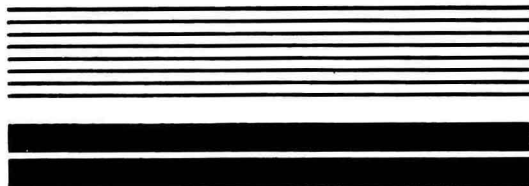
日本文学全集
45

野上彌生子・宮本百合子

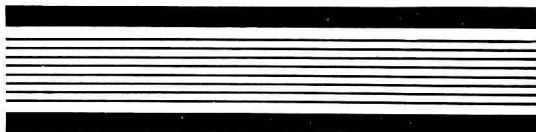


真知子・伸子

河出書房



野上彌生子・宮本百合子



カラー版日本文学全集 45

1971©

昭和四十六年十一月五日 初版印刷
昭和四十六年十一月十五日 初版発行

定価 七五〇円

著者 野上彌生子

発行者 中島隆之

印刷者 草刈龍平

装幀者 亀倉雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クローズ 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地

電話・東京(292)三七二一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたしません

目次

野上彌生子

真知子

宮本百合子

伸子

..... 五

..... 一五五

注 釈 保昌正夫 三九

年 譜 野上彌生子 井上百合子 三七

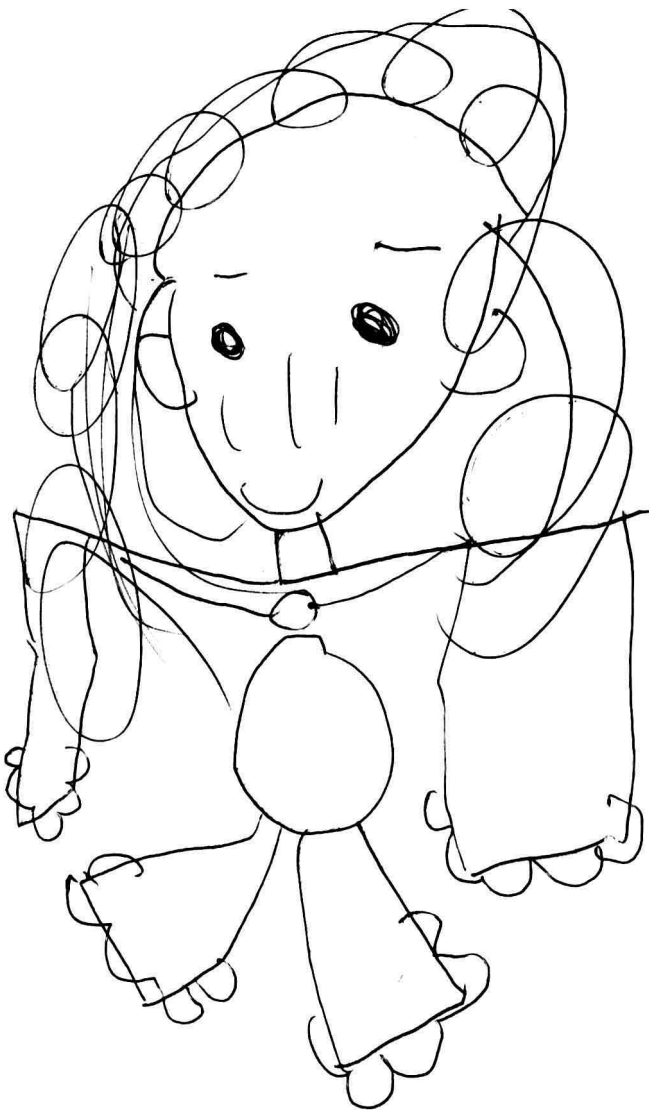
宮本百合子 戸台俊一 三四

解 説 真継伸彦 三五

卷頭写真 榎本良介

色刷挿画 真知子 小栗潮

伸子 安保健二



野上彌生子

真知子

な。——見つともないからよして頂戴。恥じゃありませんか」

わなわなする怒りで、真知子は納戸の板戸をうしろに、突っ立ったまま、母を睨んだ。娘のこの興奮は、未亡人が一度は真面目に話し合わなければならぬと考えていたことに、丁度機会を与えた。

「ちょっとお坐りなさい」

この言葉で、そこだけ板敷になって、薄べりの敷かれた、硬い床に、未亡人は自分で先にびったり坐った。

「母さんがこうして気をもんでるのを、何か余計なおせっかいでもしてるようにあなたは思ってるんですか。考えて御覧。あと二た月たてば幾つになるのだか」

しかし七十日足らずの後に二十四になることが、母を脅やかしていはるほど娘を脅やかしてはいなかった。

「年のことなんかよくつてよ、幾つだって、そんなものに運命を支配されちゃたまらないわ」

「たまらないって、年は立派にその力を持つてるのですからね。もしあなたがひとり暮らすのでなかったら。——それとも一生結婚しないつもりかい」

真知子は返事しなかった。自分から余計なことを云い出したのを後悔していた。母に限らず、誰とでもこんなことを、こんな事務的な態度で話すことは我慢ならなかった。で、ふだんから、細かな警戒と出来得るだけの冷淡で逃げ廻っていた話題であった。それだけ未亡人は捕えた機会を放さなかった。

「まさかあなただって、そんな無鉄砲なことを考えてはいないだろうから、もうそろそろ分別をつけてくれなけりゃ。——そりゃ当節のことだから学問もよござんすよ。出来ることをしとく分に損はないとだって、私はそんなことであんたに反対したことは一つだってない。でも、北海道の嫂さんたちや親類の人たちに見れば、あんたがいつまでも結婚しないのは、私が甘やかして、好き自由な真似をさせておくからだとしきゃ考えないんですからね」

結婚問題について、母がこのごろ急にせり出したのを、真知子は見遁さなかった。

父の死後、殊にふたりの姉たちが片づいてからは、未亡人らしく小石川の古い家に引つ込んでいた母が、口実をつくっては彼女をひとなかへ連れ出そうとしたり、自分でも気軽に付きあい先を訪ねたりするのは、そのためであった。専門学校を出て、なお大学の講義まで聴いている、才能のある、独立の考えを持った、美しい娘に取っては、忍ぶことの出来ないそれは屈辱であった。

或る日。

「ねえ、お母様」
外出の支度をしている母に対し、真知子はわざと隠さない不機嫌でぶっつかった。

「よそで、私の話なんかあんまりしないで頂戴ね」

母は羽織の紐を結んでいた手をとめ、眼の隅で娘をふり返った。

「何だって、そんなこと云うんです」

「自分のことひとの家で問題にされるのは、誰だって厭でしよう」

「結構じゃないか、問題にならないような娘なら、いくら頼んだって問題にしてくれやしないんだから」

「頼むなんて。——じゃ、なにを頼むの。厭なことだわ。誰がそん

未亡人は外出着の袂から新しいハンケチを出し、鼻をかんだ。

北海道の大学で生物学を教えている曾根家の当主は、未亡人と義理ある間柄であった。父は可なり高い地位の官吏であったが、金を残さなかつたので、未亡人と真知子はやと昔の家に住んでいと云うだけの生活しか出来なかつた。講座料を入れても三百円の収入しかない北海道の方だつて、楽ではない筈であつた。この不足は、内科の著名な博士で大きな病院を持っている妻の父から容易に補充された。同時に、どんな関係の間でも威力を失わない金銭の価値は、此処でもそれ自身の發揮すべきものを發揮した。彼等は、夫であり妻であると共に、債権者であり債務者であつた。でなくも温順で、寡慾で、悪く云えば朴念仁で、人間の社会よりは、顕微鏡の下の世界により多くの興味を持つている夫を操縦することは、妻に取つては何でもなかつた。

この勢力のある、可なり美しい、年から云つても真知子と七つしか違わない嫂は、その若さと美しさを北海道で消耗させる氣は決してなかつた。適當な場合に、実家の父の手を利用すれば、東京の大学か、それに劣らぬ地位を夫のために見つけるのはむずかしくないと考へていた。またそれには現在の古ぼけた陰気な邸宅を、もっと快適な当世風の様式に改築しなければならなかつた。實際あんな時代後れの不便な家で、東京の空を描いてる彼女の楽しい夢を実現させることは、思いもよらなかつた。にも拘わらず、まだそのまま手をつけないうでいるのは、転任が確定しないためばかりではなかつた。その理由を誰よりもよく知つてると信じているのは未亡人であつた。

「馬鹿馬鹿しい」自然の發展から、話がそこまで及んだ時、真知子は寧ろおかしがつて云つた。

「お嬢さんに氣に入つた家を建てさせるために、急いで結婚しなけりやならなかなんで、そんな滑稽な話であるかしら。建てたけりや、私なんかに関係なく、いつだつて建ててよ」

「そうは行きません。あなたや母さんのために建てる家じゃなし、余計なものがあるうちに無駄なことをするものか」

「そう云う風を取るのには、お母様のひがみじゃない」

「そんな考へをしておるから、あなたは母さんに同情がないのです。

——お父さまはあれだけ確かりした氣性だけに、なかなか扱い悪いところのあつた人だつたし、亡くなれば亡くなつたで、今日まで一日だつて母さんには苦勞の絶えた日はありやしない。それなのに、あなたつて人は、ひとの氣も知らないで——」

「そんな話を聞かされると、私なおと結婚しようなんて思わなくつてよ。お母様だつて、私を無理にどこかへやつて、同じような苦しみをさせたくはない筈でしょう」

「それは別問題ですよ。母さんが苦勞したつて、あなたまで結婚して仕合せになれないつて法はないんだから。それどころじゃない。今までにだつてあなたがその氣なら、どんな幸福な結婚でも出来たのじゃありませんか」

「もう沢山よ、お母様」

この遮りを、真知子は同時に立ち上り、さつさと部屋を出て行くことでやつと有効にした。

幸福な結婚と云うものが、母の云うようにそう容易に誰にでも手に入るものだと彼女には信じられなかつた。反対に、春燕の飛ぶのを見て急いでネルを着はじめるような、また十二時の時計に促されて、胃の腑が空かなくても空いても昼の食卓に坐らされるような、謂わば慣例に過ぎない一つの儀式を境界として、突然特定した或る存在が自分の存在に結びつき、話すことも、笑うことも、考へることも、食べること、眠ることも、一人の相手を意識することなしには許されないと云う奇妙な生活の中で、真の幸福や、自然な暢びやかな楽しさがあり得ようとは思われなかつた。真知子には、結婚する婦人たちは皆んな怖るべき冒険者に見えたと共に、自分が結婚に對して、と云う方しか持たないのは、まだ誰をも愛したことがないからだ、と云うことも知つていた。と云つて、誰を愛すればよいのであらう。真知子は決してそんな人には出逢わなかつた。彼女が今日まで結婚しないで来

たのは、明らかにそれが理由の一つではあったが、そのために神経質になるほど愚かではなかったし、知識に対する慾望も十分彼女を落着かした。今日のような話の後でさえ、真知子はふだんと変らない平静さで、学校に行き、帰るとノートの整理をしたり、参考書を読んだり、演習の下調べを拵えたりし、夕方からは一人の女中に手伝って、大騒ぎして晩の料理を拵えたりすることが出来た。それをまた何の屈託もなくお腹いっぱい食べることも。

しかし、食後の風呂でいい気持にあたままり、大タオルにくるまわつて、つぎの化粧部屋の姿見の前に立った時、真知子はいつもより確かに五分長くその場を離れなかった。鏡面の、洗いあげられたばかりの美しい、健康な、五尺三寸の身体は、なんにもあわてる必要のないことを彼女に証明した。

「——いつだっていいのだから、結婚なんて」

部屋に帰っても暢び暢びと楽しい気持が去らなかつたので、いつもだとすぐ何か読みはじめのに勉強机の前の籐椅子を廊下に引つ張って行き、それに凭つかかりながら気取つた中音で知つてゐる歌を次々にうたつた。綺麗なたっぷりした声を彼女は持っていた。外にはひびびえした夜気の中に、仲秋の月が少し曇つて現われ、広いが、手入れが届かないのでどこか庭園の趣のある庭を照らした。虫が鳴いた。彼女は、この荒れた庭が好きであつた。

二部屋へだてた茶の間の時計が十時を打つ頃には彼女も寝支度をはじめていた。其処でまだ女中のまつに肩を揉ませていた母にお休みなさいを云いに行つた序でに、茶棚からチョコレートを掴み出し、寝床に持つて入つてしゃぶりながら雑誌を拾ひ読みした。が、十五分もしないうち、最後の一つを割いた銀紙と共に枕許に散らかしたまま、十三の娘のように他愛なく眠つてしまつた。

目白の奥にある親の実家の田口家では、毎年十月の半ばになると菊見を兼ねた園遊会を催し、各方面の懇意な家族や、親類や、病院関係

の人々を招待するのが例であつた。今年は第三日曜が選ばれ、曾根にも大きな封筒の案内状が届いた。未亡人は、真知子のために是非行かなければならないと思つてゐるしなかつた。しかしその朝になると持病の偏頭痛で床を離れることが出来なかつた。真知子は自分もやめしようと思つて見たが、それは許されなかつた。

「誰も影を見せないで思われちゃまずいから、あんなだけはいらっしゃい。お嫂さんたちが東京にいなけりゃいいだけ、こんな時には義理は欠かされませんよ」

未亡人はまた、真知子の一番上の姉で、芝の上村家に縁づいてゐる辰子も行く筈であつたから、向うで落ち合えばひとりでも困りはしないだろうと云つた。真知子の躊躇は介添役の有無と云うようなことからはなかつた。そんなお嬢さんじみた取扱ひには、もうずっと以前から服してはいなかつた。ただ真知子は、田口家の毎年の園遊会は、年頃の息子や娘を持つ母達に巧妙に利用され、主人の老博士は、停年で大学をやめる前からプロフェッソル・フェルミットレルの渾名を貰つていたのを知つていたので、このことが一週間前の母のお説教や、近頃よく田口家を訪ねたことなど連絡がないとは考えられなかつた。同時に、それを意識して行かないようには思われたくない気も一方には強かつた。

「——構やしない。何かあんな人たちがたくらんだつて、自分の考えさえ変えなけりゃ、どうすることも出来やしないんだもの。平氣に行つてやるわ」

禿げて、血色のいい、鼻の大きな、まっ白な顎鬚を持った、好々爺らしい陽気さと、医者職業的な物柔らかなさの混和した見本のような主人は、丈も幅も夫に負けない位大柄な、権のある顔をした、器量自慢の紋服の夫人とともに、庭の入口のテントに立つて客を迎えていた。

「まあ、真知子さん」

五六人たて込んだ後のきれ目に、ひとり静かにその前に進み寄つ

た彼女を見ると、夫人は愛想よく呼びかけた。「よくいらして下さいました。お母様は」

真知子は母の頭痛のことを話し、なおその伝言として、折角の招待を外す残念さを述べた。

「そりゃいかん。悪い風邪がぼつぼつ流行^{はやり}ってるから、御用心なさらんと」

主人は医者らしい質問の二三を、お愛想の代りにした。熱も何にもないのだからと真知子は答えた。

「なら直ぐと快くおなりになりますわ。でも、あなただけでもいらして下すってどんなに嬉しいでしょう。お母様には、この節はそれでもちよいちょいお目にかかるのですけれど、あなたといったら、本当に少しも顔をお見せにならないんだから」

夫人は冗談と真面目をいっしょにして咎めた。真知子は顔のはてるのを感じた。未亡人だつて、以前は近頃のようにしげしげこの家を訪ねはしなかつたから。——真知子自身の疎遠に就いて云えば、それは夫人から持ち込まれた縁談を二度まで拒絶したこと原因していた。

「何でした、真知子さんが大学で聴いてるのは」

「社会学ですわ、ね、そうでしたね」

真知子が返事する前に夫人が引き取つた。

「ほう、偉いものを勉強してるんだな」

「ですから私云ってますの。真知子さん見たいなお美しい方が、社会学なんて似合いませんって」

それはどう云う論拠だか真知子には分からなかつたが、ただ礼儀の微笑で黙って聞いている外はなかつた。主人はそれを見ると愉快らしい、無意味な、それでこんな場合に一番役立つ東洋流の哄笑^{しょうごう}で、妻の奇抜な断定と相手の間の悪さを二つながら葬つた。

新しい客が近づいた。真知子はその関所から放棄されるのが嬉しかつた。その前に夫人は、今日は是非とも晩御飯まで残って欲しい、久しぶりだからそれ位のことば聞いてくれてもよい筈だと云い、真知子

が母の頭痛を楯に辞退しようとした隙^{ひま}をも与えず、丁度庭から其処へ来合せた末の娘で、真知子よりは二つ下であつたが、それでも五カ月前にもう結婚した富美子に、上手に彼女を引き渡した。

「富美ちゃん、真知子さんよ、ごいっしょに花壇の方でも廻って御覧なさいな。——相変らず何にもおもてなしは出来ないのですけれど、菊だけは今年は上出来でした」

二人は連れ立って、云われたものを見るために並んで歩いて行つた。言葉の通り菊は見事であつた。しかし客は花壇の前よりは、広い庭の其処此処に設けられた模擬店の方へ熱心に集まつていた。この無邪気な心理の働き方は、ことは違ふが、案内者の富美子の上にも同じく作用していた。打ち明けて云えば、三ところにも作つてある花壇をいちいち見て廻つて、父の受売の菊作りの説明をさせられるよりは、もっと当面の、話したくてたまらない話を富美子は持つていた。で、一番手近な一つを三分の一見てしまわないうち、そんなものは打つちやつて、大事な話題の方へ近づいた。

「——でも、真知子さんはいいわ」

富美子はこう云う風ではじめた。

「なにが」

「いつまで呑^のみで、好きなこと御勉強出来るのですもの」

「あなただつて、なさろうと思えば何だつてお出来になるじゃないの」

「駄目。——ほんとに駄目よ、家を持つちまっちゃ。いちんち忙しくつて」

真知子はもう少しで笑い出しそうになつた。父の病院に勤務している養子同様の夫を持ち、同じく父に供給された田園都市の文化住宅^{ぶんかじゅうたく}に二人だけで住み、これも同じく父の供給に相違ない婆やと小婢^{こめい}を使つて暮らしている二十一の細君でも、結婚したとなれば人並にこんなことを云うのを教えられるのであろうか。でも田口の娘たちの中では、この気のよい、そばかすのある、小さい富美子が真知子は割に好きであ

ったから、相手の可憐な嘆声を無視しないように気をつけた。
 「私また、あんたなんか毎日ひま過ぎて困ってらっしゃるんだともってたわ」

「あら、どうして」

富美子は驚いた嬉しそうな声で叫んだ。「それどこじゃないのよ。それなのに、誰にでもそんな風に思われているから口惜しくなっちゃうわ。だって、宅ひとりだっても手がかるんですけどもの。ひとつは寝坊するからいけないのよ。私だってそりゃ九時前には起きられないけれど、あの人ったら、それよかどうしても三十分は遅いでしょ。それからやっと起きて来たともうと、さあ顔だ、頭だ、着替えだ。家じゅう大騒ぎさせて、それで靴下一つ自分で穿こうとはしないんだから、憎らしいってないの」

しかし留守の間は十分ひまな筈だ、と真知子が一言挟んだのに対して、富美子は決してそうでない訳を十近く並べた。先ず小鳥の世話と、一匹のペルシア猫の手入れと、その猫の毛と同じくらい綺麗にウエーヴさせるためには可なり時間のかかる自分の髪結いと、訪問と接客と、料理と編み物と、今でも一週に二度ずつ稽古に通ってるピアノの練習と——

「ピアノってば」

富美子は思い出したように、其処で話を転じながら、「この間の帝劇のX——お聴きになって」

その著名なポーランド生れのピアノリストは月初めに十日間帝劇で演奏した。真知子は行けなかった。

「まあ、惜しかったのね。私、二晩だけは行っただけれど、お仕舞いのショパンがどうしても聴きたくて、その積りで切符買って置いて貰ったのよ。ところが、どうでしょう。病院の方で手の放せない患者さんが出来たとかって、とうとう行かずじまい。残念で諦めきれなかったわ。ですから、あんな時にはA—の従妹が私いつでも羨ましくなるの。旦那さん眼科でしょう。どんなことしたって夜まで引つ張り出さ

れることは決まっています。それから見ると内科は面倒で、氣骨が折れて、本当にいやだともってよ。そうはお思いにならない」

実際、一方は命の問題であり、一方はこの上なく悪く行つたところ、誰かを盲目にするに過ぎないのであったから、その訴に対しては真知子は理論的に同意しないわけに行かなかった。と、富美子は、すっかり満足し、なお幾ら話しても話し足りない話題を続けるために、割に人の少い洋菓子店のテントを選んで休もうとしていたところへ、夫の木村自身が入って来た。医者らしく身についたモーニングの胸に、接待係のしるしの赤いリボンをつけた木村は、真知子と形式的な挨拶を交換するとすぐ、妻に近づき、明らかにそのために彼女を探していたように、何とかさんのお嬢さんが見えたと云う報告をした。

「奥さんも」

「よかったわ。母さんさっきから待ってらしたのよ」

富美子はその言葉で自分もまた同じ客を待っている熱心を正直に表わしながら、でも傍にいる真知子を忘れるほど不作法ではなかったの、聞いた。「あんた御存じだったわね、柘植さんのお嬢さん」

「柘植さん——」

真知子は思い出せなかった。

「ほら、あの子爵の。——貴族院へ出ていらっしゃる」

「いいえ」

真知子はそんなお嬢さんは知らなかった。

「この春私たちの音楽会の時お逢いになったと思っただけれど。——いらっしゃらなかったの。どうりで。多喜子さんって、快活ない方だわ、ピアノが御いっしょなもんだから、この節私の一とう仲よしなの」

富美子はこの打ち明けを無邪気な笑いでし、真知子ともきつといい友達になれるから、一緒にあちらへ行つて紹介しよう云った。真知子はもう少し足を休めて、其処のおいしいお菓子を食べて行きたいと

云ったので、彼等は別れることになった。

「じゃ、また後でね。——お菓子もだけれど、向うのおすし、ちょっとおいしいのよ。めし上って見て頂戴」

富美子はそんなことを云い残し、妻がしゃべっている間余計な口を入れないでにやにやと温順に待っていた夫と並んで、楽しそうに、しかも十分奥様ぶって澄まして出て行った。

一杯の珈琲と、一皿の菓子と、三分間手のつかないまま真知子の卓に載っていた。云うまでもなく彼女を其処に引き留めたものは、そんな飲み物や食べ物ではなかった。真知子はかかる場合に未婚の娘が普通感じさせられるような羨望からは自由であった。仮りに何か似た感情があったとすれば、それは富美子の幸福な結婚そのものよりは、その結婚に、寧ろその夫に満足し切っている、彼女自身の単純な慾望に對してであった。真知子は、一年ばかり前母が急性の腎臓炎で入院していた関係から、木村をば富美子の夫としてより前に、病院の一医員として知っていた。丁度彼女との結婚を決定的にする第一条件であった学位が取れたばかりの頃で、彼は小さい少し突った頭を仮漆塗の羽目板のように綺麗に光らせ、それも誰のよりも綺麗なまっ白い上っ張りをふわふわさせて、廊下を気取って歩きながら、こっそり看護婦にからかった。特別に親密だと云う噂のあった、上方訛りの、眼の可愛い看護婦をも真知子は知っていた。

しかしあの楽しそうな富美子に取って、こんな余計な回想が何の役に立つだろう、と考えると真知子は馬鹿馬鹿しかったし、下らないことを忘れもせず覚えている自分に対しても厭気がした。で、急いで卓の上のものを空にしてそこを出ると、ふた足と離れないうち誰か後から右の肩を突いた。

「幾ら探したか知れやしない」

この言葉と姉の派手な美しい顔は、同時に真知子の目と耳に入った。

「そんなに探して」

「だって、こんな隅っこ不景気な店にいたんじゃ、分かりっこないじゃないの」

「これでも、富美子さんの御案内なのよ」

真知子は云いながら、彼女が引き受けてくれたその役目に対して、どんな報酬を自分が払ったかを姉に知らせたら、きつと面白がるだろうと思った。が、話さないうち、辰子は田口の奥さんに聞いたと云って母の病氣のことを云い出した。

「大したことはないんだって」

「いつもの頭痛」

「ならいいけれど、お母様この節は少し弱ったわね。まあちゃんも余計な心配をさせないようにした方がいいのよ」

「お母様が余計な心配をしたがるからいけないんだわ」

「あんなこと云って」

「でもそうじゃないの」

「そうじゃありませんよ」

「そうですよ」

議論の主題についてはどちらとも口を出さなかった。でもそれが何であるかはお互いに分かりきっていたから決して負けず、姉妹らしい微笑で云い張りながら歩いた。

昔の大名の下屋敷であった庭は、どちらに向いても十分広かった。

また違った方向で違った特色を持っていた。二人の進んだ方は雑木と赤松の自然の森に続き、旨しい食べ物のテントも其処まではなかったし、従って一般の客は近づかなかつたから、歩きながら話すには便利であった。暫くぶりに逢って、身内のもものだけ分りもすれば楽しくもある話を二人はためていた。例えば北海道の方の話。真知子のすぐ上の姉で、Y—の高等学校の教師の山瀬に嫁いでいるみね子や、その一人の小さい娘の話。都合で近いうちに皆んなして出て来るかも知れないと云う便りのあった話。——

「そう云えば、その手紙に」

真知子は右に並んだ姉の表情を探るように見詰めて、「お姉さんのことひどく心配して来てよ」

「どうして」

「誰か東京から行った人に、義兄さんのこと聞いたらしいの」

「だって、上村の道楽の話なら、今更めずらしくもないじゃないの」

辰子は平然とそれを云った。近県の多額納税議員の息子で、高商を出た後、父と縁故の深い会社で重役並みの待遇を受けている上村は、遊ぶ金と時間に不自由はしなかった。器量好みで大騒ぎして貰った辰子に対しても、半年と誠実な夫でなかったのは関係者に知れ渡っていた。

「でもこの節の様子はあちらに分かつてなかったから、いろいろ聞いて驚いたらしいの」

「誰だか知らないがそんな田舎まで行って、そのひとも余計なお世話じゃありませんか。それで、一体、どんなこと饒舌だったって書いてあるんです」

真知子の処女らしい羞恥と厭悪は、義兄の悪い噂の詳細を口に出して、その妻なる姉に報告することを許さなかった。で、それには答えず、自分の感想の代りにした。

「でもよく我慢出来てねえ。私なら決してそんな生活には堪えられないわ」

「そう思うのはまあちゃんが二十三で、私はそれより六つ上だって証拠ですよ」

「いいえ、私なら二十三で我慢出来ないことが、二十九だって三十だって出来るとは信じないわ」

「じゃそれが出来るんだから、うんと感心して貰ってもいい訳ね」

その言葉の通り、自分の生活を巧みに調節することを知っていた辰子は、夫の放蕩に対してもヒステリにはならなかった。その代り彼女は着道楽をし、芝居に行き、色んな芸事に手を出し、同じように不幸な、金持の、お洒落の、中には浮気者もある気楽な婦人たちの遊び仲間

間を持っていた。子供がなく、両親は田舎の家に別居しているので、どんなことでも出来た。真知子は姉のこれ等のやり方には賛成されないものがあつたし、傾向や趣味から云つても違っていたに拘わらず、かっきりした、女々しい点のない自由なその性格は嫌いではなかった。寧ろ非常に違ったものが非常に似ていると云う有り勝ちな例に準ずれば、兄姉ではその姉が最も自分に近い気がした。顔も二人が一番よく似ていた。ただ辰子の方は幾らか肥りかけて、結婚した三十女の瑞々した膨らみを持っていたに比べると、真知子は中学生のようにただまっ直ぐであつた。並んで歩いている肩を見ても、姉よりは二寸は高かつた。

二人は十月の午後の大陽の下を黄色く錆びた森に沿うて歩きながら、再び庭の方へ出ようとした。余興の太神楽が子供っぽく、陽性な太鼓の音を伝えた。真知子は晩までいるか姉に尋ねて見た。辰子は友達と芝居の約束があるので頓で行かなければならぬと云い、客がたて込んでいれば黙って帰るから家の人たちには後でそう伝えて貰いたいと云つた。真知子は引き受けた。しかしまだ森からすっきり離れて仕舞わないうち、辰子が逢わずに行くかも知れないと話したばかりの主人夫妻が、富美子と共に同じ年頃の美しく着飾った娘と、その母らしい中年の夫人と、今一人の若い立派な様子をした紳士を案内しながら、反対の路を歩いて行くのが目に入った。真知子たちは斜面の小高くなった木立の間を抜けていたので、向うからは気づかれなくて過ぎた。

「あのお嬢さん知っている」

「柘植さんで云うんじゃない」

真知子は富美子が先刻話したことを思い出しながら答えた。辰子は連れの紳士に就いても知識を持っていて、彼が有名な旧家で千万長者の河井家の一門であること、早くからケンブリッジに留学して考古学を専攻し、日本にはやっと半年前帰つたのだと云うことを伝えた。

「北海道のお兄さんなんぞも、あちらで懇意にしていたらしいの。何

でもそんな話だったわ」

「どこでお逢いしたの」

「この間の歌舞伎の慈善興行の時、今日とすっかり同じお取り巻よ」
この最後の言葉で話したのも聞いたものも一緒に微笑した。云うまでもなく、田口夫妻が目的なしにそんな役目を勤める筈はなかったから。同時に真知子は、当面のそう云う大事な仕事がある間は自分まで余計なおせっかきをする筈はなかったのだと思ひ、今日要らない心配をして来たのを滑稽に感じた。

晚餐は仏蘭西風なあっさりした、それで完備した食堂の裝飾に負けない贅沢なものであった。人数は多くはなかった。大部分内輪の人々で、その中に残った河井は最も大切な客として取り扱われ、多喜子と並んで掛けさせられた。真知子は反対の側に富美子と並び、右の椅子には食堂が開くばかりになって飛び込んで来て、女主人の倉子からの親密らしい打ち解けた調子で遅刻を詫言しながら、竹尾と云う名前で紹介された若い医者がかけた。しかし真知子の注意は、そんな知りもしない、鄭重にもされない男のひとりよりは、向側の二人の方へ引かれた。まわりの人々はみんなその二人を目標にして話したり聞いたりしていたし、それを傍観することは面白くないとは言えなかったから。

最初は河井の邸内に建てている研究室のことで話が賑わった。

「B―君の説によれば」

主人は主任の建築家の名前を挙げながら、「完成の上は、日本では他に類のない理想的な研究室になるだろうと云うことでしたが」

「それ程のものではありません」

河井はもの静かな、おっとりした態度で受けた。

「いつ頃お出来になりますか」

夫の後を継いで倉子は聞いた。

「予定の通りに行くと、あと二た月位で大抵すむ筈です」

「お出来になりましたら、是非ねえ、奥様」

倉子夫人が柘植夫人に誘いかけながら、一緒に参観したいものだと云う意味を述べると、夫人は勿論賛成し、同時に娘もそんなものを見ることに非常に興味を持っていてと云うことをつけ加えたので、多喜子はそれに依つて都合よく話の仲間入りをした。

「参考品の整理だけでも大変ですわね」

「まだ打っちゃってあるんです」

「あちらのお珍しいもの、随分おありなですって」

「整理がついたら、そのうちお目にかけますよう」

「多喜子さん如何です、少しお手伝いしますたら」

主人は勧めた。「そう云う仕事は婦人の方に適當だと思ひますね」

柘植夫人は多喜子が細かい分類をしたり、片附けものをしたりするのが子供の時分から好きであったと云う証明を其処に挟んだ。

「でも、その方の知識が幾らかなければ駄目ですわね」

「なに、馴れば誰にだって出来ます」

この返答で多喜子自身は元より、その会話を口を入れた他の三人も非常に満足そうに見えた。それに続いた話の間に、河井は中央亜細亞の方を廻つて、今少し貴重な標本を集める積りであったが、既に未亡人になっている母の病気の報知で旅程を繰りあげて帰つたのだと云うことを真知子は知った。

「あの当時の御容態では、御母堂が今の程度にまで恢復されようとは私はじめ誰も信じなかつたのですからね」

「それにしても、よくまあ長い間お母様がお手放しになつたと思ひますよ」

倉子は今独逸に行つている長男を引き合ひに出しながら、「殊にお宅様では外にかけ掛けないお後嗣でいらつしやいますもの、ねえ奥様」

倉子の言葉には何でも決して異議を立てないことに極めてあるらしい柘植夫人は、この場合もすぐ同意し、ああ云う確かりした立派な方でなければ中々出来ないことだと云つて賞め立てた。

「お出来になりましたら、是非ねえ、奥様」

「お出来になりましたら、是非ねえ、奥様」

「お出来になりましたら、是非ねえ、奥様」

「お出来になりましたら、是非ねえ、奥様」

「お出来になりましたら、是非ねえ、奥様」

「お出来になりましたら、是非ねえ、奥様」

「お出来になりましたら、是非ねえ、奥様」

「お出来になりましたら、是非ねえ、奥様」

「お出来になりましたら、是非ねえ、奥様」

「お出来になりましたら、是非ねえ、奥様」

「お出来になりましたら、是非ねえ、奥様」

「お出来になりましたら、是非ねえ、奥様」

「お出来になりましたら、是非ねえ、奥様」